大浦勢員を以大敵を打こなすより難波を上りて
溢者ど掠奪いたすなり八方へ走り廻り女の衣類を
剥ぎ取り財宝を奪取四方より火を放焼立る此有れ
ば気をぬけ闘を常も消失く弓引者一人もなく
皆降参しこうりやる波岡屋へ入れ人も付添若もな
くれば我と乗物のうしろへ乗り呼びかけ老人共は畏ると大勢
打囲み島信公の陣陣へ高ひくかき乗り此程の
礼を申上て上を載せる支度り波岡屋をば
島上十郎雑兵百人計りにて西根の寺へ引きけ
る

偖城中城外に大を高き町人如何居をべく侍
衆枝村西領名遠の衆を信ず三日迄逗留
大浦へ陣ぬかりる其日波島の城りを立る落書
〜〜
矢いくつ程力に頼る和泉海りを弓引人に波島に城
偖城中に島信公の陣に入れ人共に
島行くる者とて其人に相応に伊五兵人共に
参り陣所の外にて大人の中に礼を申上者
波島に帰りる其後波岡屋へ出陣共に城に
方へ参る望まる也送り届け進らせとあり

なれば其義まてはなく秋田へ来候て十三郎殿へ
細紙を仰付られ其方奇へ奇り申和を以後秋田へ
送りはて其方れ居完るく切腹させ仕り畏
はべるく秋田へ行向ひ紙面の影りはて秋田へ送り紙
中若るく此方れ新しめ〳〵くく乗物を以直り
秋田へ御使仕はして切腹を遂させ申る其時の最
期まるこまりかしとそ

古里と云ふ所に道芝れ高りのき秋田

天正六年寅七月　上杉旧波岡城を攻

北留方近辺要害落の事

愛宕波岡城の前の茅ヶ北留方面秋田へ三人のわしの
此人ども芝居れは病死さ其子息北留九
郎秋則へ生年十七歳なるが家義其備
て綱ヶ谷吉の若者へ其波岡の家中なて
其名をもつて人なるが波岡城の日ハ郡用者
ヶ油川の城を奥願若九郎で来りる然る
所波岡より の後人を大秋迫山を打破清輝仮
新城油川の名まへ逃遁し大軍長て大軍
を引はれ此日の高見比波岡抑寄城を攻
と責落し波岡城を生捕りて長なまて打

かこみ大将への働にて其身ハ猶浪岡に退去して諸軍
の指揮を申付浪岡御所一家の人々を捜し出し誅戮せん
とのおもむきなりしかば御傳しけるが左近将監ともに
口惜き次第なり親すでに世しければ左近将監申けるは
おくれまいらせば假速命を存命ても城へ入り敵に渡して
とても浪岡御所をばおかくして色々りうはへさせ参らせまじき
それ譜代の人々ハ一人も出合て防ぎ申べしとて
嵐かくとおし身すて川を渡しけるが
さてや大将の人々ハ浪岡の家中に侍がおのおの
くく錄判せんことを口惜られまして我等一人欲

とも走破り大将し大軍にかけ込み花やかに討死して家
に疵をば付まじきぞと思く用意せよやとぞ申ける其
時北畠譜代の郎等に千田因幡守とて有けるが
尊今度候しける此若輩にてさる此者共も敵の恩徳にて
は先者共も覚えて大将の大軍に勝軍して
進みける其中く後に三十七人の人数にて何程のこと
仕りつき大軍に責られ腹切るもはや却て歎の
限なり是見させらるべしよしとて御家の討
死とげさせられても何の益かあらん御譜代の歴々
が一防も防して敵に加りし人々も恥のかずもなくて

世の中を面を晒して居りてや唯此度は理をもつて
命をば今のがれ申婦君は四行和と云ふ所の南
部の方へも立退せんと頻りの練りる故然るべ婦君の
出行和を見るく若空くも成ぬべきの身の安否
を究むべし　桜井権兵衛と新里作蔵と同道して
ぬべし　又荒川仁蔵と波多吉と同道して
我が共方同道して二日目の今日
より七日目の又翌る今日にて夫より若殿様
先我が本人は大歓迎より東の方此野の末より
権兵衛作蔵は西の方仮信原の方へ
別れ〳〵仁蔵吉は波多迎の熊祠〳〵村〳〵に
して本国へ別れる　備婦君は乳親の女間垣といる
女と共に桜井の婦人〳〵年寄の者ありて出
立して若き女は若衆の代行として婦君二
人の者より付添ひ男は千野四人の者人の
ある強者者も強者人も入内の
観音堂の庵已のうちは谷深くして松原も不入和
なれども〳〵草本茂く生ひ繁り茂げり
暗して人里を去り谷の者婦君志〳〵美よか
られぬ人〳〵居あり山路の月影を

申ていうべき覚しめすべき罪うくして配所の月
をかこちあかしてはりんと誘ひをぞ姫君新で笑へかの
ものいはやるなる事信を相手にして同列の恥を神の宮
をあくしをくしを人を殺合のうてはの厨かぎりうる支より神
川の梅のかぶ義九郎中さんしに此上は大蔵殿摩耶
しかるべく越てゞ某大蔵殿美濃守入道とわりなれば
左近将監さんに新くいはん摩耶の事は先く差置て
ゞ藤代の殿くに何事も摩耶の事ゆへも我おい一類も
はんで南部九方へ高ゆへしに送られとして天正六年
寅の八月三日より木の実ふる船まのり田南部へそれに除き

ゆ其事無解案昌ゝく今まわりとぞ少へ久る其後久く
くゞゞして義九郎も進藤して神川をもはるはさせも
ゆへで若宮ゆれも秋則いかる事まして推はう南部へ
立のさゆへる平と後まで思ひ合せて皆唐をひるゞで
神川の城国落ゝ事
去程に為信公神川の城国瀬義九郎を討さんと謀を
ゆへ彼い大臣病の名わるゆれで討君を以て安く
とゝをゝんと神川道忠の縁れ出ん事を左右に後くゆて
ものの上りく出討畠と示し合く遣いさん天正十三
年二月廿六日為信公彼国をゆ馬ゆ国出せるの

夜よ入小笠原伊勢兵平中書兵庫頭殿人数八百ばかり
大歩廊津波板を打紙まだ東雲の時分新堀村を乗除
と長の山の方の若たち数百人ばかり男女打立打連
く辰の刻の始より油川の町まで残らず焼き捨て唯今
大浦左衛門の城を責めんとて大軍を引たれ押寄り
新堀村を焼き払ひ鬨の声を上げ此方へ向かうべきぞと
声々に叫び色々に落ぎられし事ども数しらず
ばかりなり新城村の此方は無木を多く
伐重ねうるに火を付焼立られば煙さんに燃上りて
黒烟天をかすめ鬨の声山々に先達て油
川へ逃来りし女童声々に今を新城村なれば泳
落ぎかけられで油川の老若一同に逃さいぐ新城村
の公民たちかねて浮世に長らへて子孫の果を見んとい
新城へ立帰り畑の中へ先入て焼死んと打寄りて
又小舟に取乗て田名部の方へ行んとて以の外に
さわぎられで油川の若たちまで一同に逃去る色をみて元
来臆病なる長九郎家来に向て云るは大浦の大
勢押寄あらば進退ならべし敵近づく共先は
個や田名部へ通りて一家を引具し海辺に出小舟に
取のり我先にと落行る住将のなる弱兵なりし

いつ給のごとくにて弱将のてゝ小強兵やなりうん思しく
は為先く敵一人もなけれど大軍勢いを見て已の寄る
兵陣一町の程動と為ばかりを信公へ注進
くれで時に十九日子餘の人数にて波岡を打立申の刻
そうる浦門へ着陣あり門徒寺より四一宿にて外浜
接番へ伝なる此時浦川の町に
浦門より名を流し一揆協力さのこと若九ゞ勝せざうせべ
さて門徒寺より五日ほど遅参あり信長の人々八高田荒川
横内の人々ゆもゆれやとる此所和泉を中なる入させあい
四月三日浦門を立あり其日八波岡より四一宿泊三四日

巻之下

大軍陣に帰陣し是為信公十年三十六歳の時事しるべ

南部勢淀瀬石責之事

淀瀬矢和ハ南部の行ふく東部ちのを知ふく淀瀬石の城
ふ居住しく来月を送ちるを石川大佛の寄と成てうの
爰かしこの取合に一度も味方ハ色を不立剣（大光寺
の流寄を右京亮攻）時波岡の押勢とうう波岡城
の時ハ大軍勢の先ゝとうう右京亮（手力とう事逆心
の如く社石軽速ま様伐せ）て天正十三年石四月
十四日中長抗日向ちの者大将ゝて其勢三千原高大刀嶽
トヒルヤ山の間を押通し鳥長根といふ大切所を越き

ハタケ臺原森崎を押通り黒石の末打抗野へおろし陣
取く居たりける大和も本郷竹ヶ鼻の百姓なるヤ付
河原町通りを堀切柵をうち近辺に有る数百人番
人を付守り白鉄又濃瀬石の堀中より穴尤の長三百
間横たをる又堀下れ町屋七百軒ありける中に以上の男
子ハ刀或ハ鎗薙鎌番ゑどを持セ又ハ竹やり棒チギリキ
ヽく招きおき堀小幅わまり堀中より五尺大谷とて
鉄て湯を沸し中間より湯を入く敵已に屋敷をのゝしば
石垣柵の上へうちけ湯を汲掛んと柄長杓を相添女人
たちヤ付うち新て敵将日向方へ使者を以ヤ戦ハ

其方日本の不義を(今度吉兵を討ちとり義
ら)る然るとても一旦れ日義をひるがゝ日向後恵を忘れんと
ならば速に味を以て家をゞ一命をゞ日向今
度の功に報くヤ信助まゝせんたのくハ速に攻敗ら
んとぞ申けり大和義を聞て紙一ツとして不義知
大和不義申ばヤ科を糺明ゝ中ゝ急も角もあり
べきに大海のく押寄城を囲ヤ使を以て
也あり実に御を文ゝんとのくば武士の大法ゝく滅し
まゝんとぞ云ゝうる日向大に腹立く無益急に
責ゝるが大和に能まで敵れ終に敗北ゝたりける

淺瀬石方へ貢数百餘打取しより此方れ打死一人もなり
しとて惣して日向ゲ備somoよい味方三千余を三ヶ所
分一ヶ所ハ大ヶ口へ押寄せ一手ハ一の渡りより打越て河原
池原表の方へ押ゲ一ヶ所ハ打松原より押ゆ川原
ヶ瀬を立ゆく味方れ弱く人方を援んとて計りなる
されども大和より歌れ深溝より追入られ敗北よりてい敵
よりれ此時大和の勢の中より村上理右衛門と云ものより理
右衛門の馬陣より大炮を風と云剛力の者有りしを具足を
も着ず只白拵にて棍棒のたく長さ一丈ばかりあり
ぶるを打ゲて陣より出る又理右衛門より春女も剛なる

女なれ萬福寺れ大刀付を着し上なる小袖を脱ゲ
髪推乱し御奏し小長刀を振ゲ下の女四五人ま
ゆ〳〵棒長竿を打せ石運理右衛門より馬より倒て
ゆるが故敗北をなく主従夫婦男女なる十三人
ゆく行文戦ひ故に敵ハ二百餘より馬上三騎より地方ハ
僅十三人なれども敵百十一討取るとなり其内郎ハ女
房が長刀ゆく掛く家来ゆ首とば取せしとて扨又岸
野左兵衛と云ハ是も大和が家来なるが大方れ剛の者なる
口の勢より自身陣を取大勢を突崩し内より首七
ゆく取しとて是れ亦内の者なりしと也 備為信公

八時半ごろ高田を出て十時半ごろ高田行きの押
領をし本陣とする国府の宿はずれの居住せるものつくる森
国人を含む五百人の人数と和泉守田舎館の押へとして
横ぎり口へ出さんとせし敵軍なれども本陣前の敵軍
をうちくずれど敵軍をうちはらひ本村の陣に出行きく
中佐の一名遠大和守陣に入るもうしかの軍功と
ゆらひのうひまうり為信公ハ行伝野に来られ歓
の極とゆるして引返さるべきを大和守と及逆言とを
言る結び婚を安藤に諸もの馬の頭を立直しかや
色めきて見て処に三男城と和姫婚勝ちの安由

を頼る練れど大和も甚意を任せ為りなるが云るべく汝
等が首とは必大海を渡りて崖づたへして居
なるべき為信公ハ陣屋石の町へ出るを宗入羽と治左
衛門二人をもひ忠義と褒称ありて本村を
度まして独立千貫をうりて岸野九郎も四三百貫下
これより南部勢ハ大敗軍して行方を引揚し西郷
引取人をうつる竹鼻に居る者ども本郷海道と海岸
へ通人とされた高館の源と大坂をうり切坂の所方より
柵をうつ内に本郷竹ノ鼻吉村の人民ハ大勢集り
防きとめられむ まうり野きされも通馬場廃道る